



Topics 1

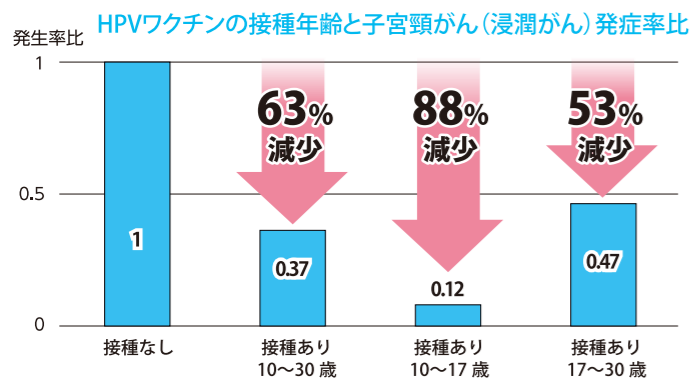
HPVワクチンのこれから

—定期接種の積極的勧奨で男女ともにHPV感染の予防を—

2020年、COVID-19が世界中で感染を拡大し続け、日本においても収束のめどが立たない状況が続いています。確立された治療法がない未知の感染症に対して、予防ワクチンへの期待が高まっています。一方で、世界中でワクチン接種による予防が推進されている子宮頸がんに対して、日本ではワクチンの積極的な勧奨接種が再開されないまま7年が経過しました。最新データをもとに、日本におけHPVワクチンのこれからを考察します。

HPVワクチンで子宮頸がんが減少

2020年10月、スウェーデンの全国規模の大規模調査によってHPVワクチンの子宮頸がん(浸潤がん)の減少効果が報告されました。スウェーデンの10～30歳の女子・女性集団のうち1,672,983人を対象に行われた、子宮頸部の浸潤がん発症の追跡研究で、追跡調査の結果をHPVワクチン接種歴と解析し、ワクチン接種と子宮頸がんのリスクとの関連を評価しました。結果は、31歳の誕生日までに子宮頸がんを発症したのは、4価 HPVワクチン接種者で19人、未接種者で538人。子宮頸がんの累積発症率(10万人当たり)は、接種者で47件、未接種者で94件でした。未接種者の子宮頸がんの発症率を1とした場合、ワクチンを接種した女性の発症率は0.37となり、未接種者に比べて子宮頸がんになるリスクは63%減少したことになります。



この調査では、17歳未満でのワクチン接種で、子宮頸がんの発症率が大幅に低下することも報告されました。未接種者の子宮頸がんの発症率を1とした場合、接種者の発症率は10～16歳のワクチン接種で0.12、17～30歳のワクチン接種で0.47でした。がんになるリスクは、10～16歳のワクチン接種で8分の1以下、17～30歳のワクチン接種で半分以下に低下しています。

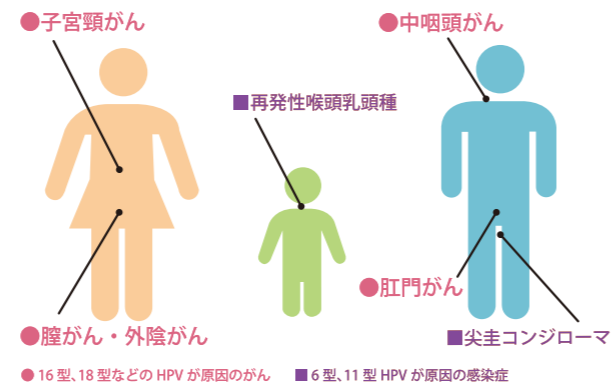
若い女性ほどHPVに感染しやすい

HPVはごくありふれたウイルスで、性交渉で感染します。HPVには、若い年代ほど感染しやすく、性交渉の経験がある人の80%は知らないうちにHPVにかかったり、治ったりしています。

日本人の子宮頸がんの約65%が16と18型HPVが原因です。年齢別にみると、子宮頸がんのうち16と18型HPVが占める割合は、20代で90%、30代で76%、40代で66%となり、若い年代ほどHPVワクチン接種で子宮頸がんの発症を予防することができます。

HPVがもたらす病気-男性への影響

HPVが原因となるがんは子宮頸がんだけではなく、近年急増している中咽頭がんや肛門がんもHPV感染が原因で発症します。男性の口腔・咽頭がんは日本でも増加傾向にあります。このようにHPV感染症は、女性だけでなく、男性に対しても様々な病気を引き起こします。



男子もHPVワクチンの接種を

HPV感染は男女間で感染を繰り返すため、性別にかかわらず予防することで感染の広がりを抑えることができます。男性のワクチン接種の目的は、男性本人のHPV感染による病気の予防とともに、自分が感染源とならないことで将来のパートナーを子宮頸がんなどのHPV感染症から守ることがあります。実際に男子へのワクチン接種は多くの国で推奨され、アメリカ、イギリス、オーストラリアなど20か国以上の国で公費接種が行われています。日本では、2020年12月から男性が4価ワクチンを受けられるようになりました。(現時点では任意接種)。

HPVがもたらす病気—子どもへの影響

HPVは、子どもの病気の原因にもなります。赤ちゃんがHPVに感染している母親の産道を通るときにHPVに感染し、子どもの気道にいぼをつくります(再発性喉頭乳頭腫)。良性ですが、重症化すると呼吸ができなくなり命に関わります。また、再発しやすく切除手術が数十回も必要になる場合もあります。

2021年1月、国立がん研究センターが「母親の子宮頸がんが子どもに移行する現象を発見」と発表しました。赤ちゃんが生まれて初めて泣いたときに、母親の子宮頸がんのがん細胞が混じった羊水を肺に吸い込むことによって、母親のがん細胞が肺に移行したとの説明がありました。

最近では妊娠中の検査で子宮頸がんが見つかるとの報告があり、妊娠の継続・出産を諦めて子宮を摘出する場合があります。子宮頸がんは、子育て世代の女性の命や子宮を奪うことからマザーキラーと呼ばれています。さらに、生まれてくる子どもを守る意味でもHPVワクチン接種が重要です。

9価ワクチンで高まる予防効果

2021年2月、2価「サーバリックス」と4価「ガーダシル」のHPVワクチンに加えて、新しく9価「シルガード9」が接種できるようになりました。9価ワクチンでは、予防可能なHPVの型が追加され約90%の子宮頸がんを防ぐことができます。

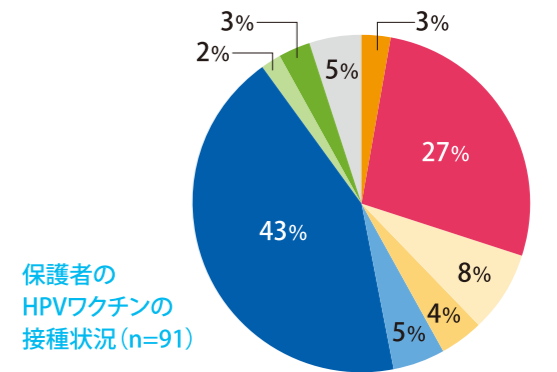
2021年2月現在、9価ワクチンは定期接種では受けられません。

HPVワクチンの種類

価数 ワクチン名	定期(対象)/任意	予防するVPD	接種できる年齢性別
2価 サーバリックス	定期接種(小学校6年生から高校1年生の女子)	70%の子宮頸がん(16,18型)	9歳以上の女子
4価 ガーダシル	定期接種(小学校6年生から高校1年生の女子)	70%の子宮頸がん、肛門がん(16,18型)、尖圭コンジローマ(6,11型)	9歳以上の男女
9価 シルガード9	任意接種	90%の子宮頸がん(16,18,31,33,45,52,58型)、尖圭コンジローマ(6型,11型)	9歳以上の女子

個別送付で接種率向上の兆し

VPDの会では、2020年1月から「6年生になったらHPVワクチンを接種しよう」というポスターを掲示して、ワクチン接種を勧めています。ポスターでの接種状況の調査では、「すでに接種」している人もいますが、約4割が接種意向はあるが未接種であり、さらに半数近くが接種を迷っていると回答しています。

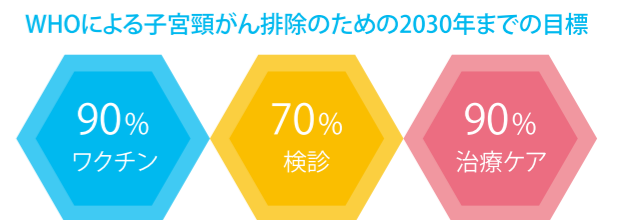


対象:2020年4～12月に、VPDの会作成リーフレットに記載のURLから「HPVワクチンに対する考え方」に任意でアクセスしたHPVワクチン定期接種対象者の保護者

2020年10月9日、HPVワクチンの定期接種対象者に接種時期や場所を個別に案内するよう、厚生労働省から全国の自治体に対して依頼がありました。HPVワクチンが定期接種であることを保護者が知ることは大きな前進で、少しずつ接種する人が増えています。保護者が予防の必要性を理解し、不安を払拭して接種を実行するためには、自治体や医療者による積極的な情報提供や接種勧奨が不可欠です。

HPVワクチンのこれから —子宮頸がんのない未来をワクチンとともにつくる—

これまで世界中の女性の健康と命が子宮頸がんによって失われてきました。しかし、これからはワクチン接種と検診で子宮頸がんを予防し、子宮頸がんによる不必要な犠牲を減らすことができます。



WHOは、全世界的な公衆衛生上の問題として子宮頸がんの排除のための行動を呼びかけました。世界では子宮頸がんのない世界を描き始めています。日本では積極的勧奨接種を再開することは言うまでもありませんが、さらに男女を対象とした9価ワクチンの定期接種化を実現することが急務です。同時に、積極的勧奨の差し控え期間の定期接種年代に対するキャッチアップ接種も必要です。

当会では、厚生労働省に対して制度変更の提言をするとともに、会員医療機関において、機会あるごとに—女子に限らず男子にも—HPVワクチンの情報提供と接種勧奨をおこなっていきます。